

■ 2, 日本の幹周測定法の歴史

■大日本名樹名木誌

大正2年、林学博士・本多静六が編纂したもので、1500件の巨木を紹介している。この著書では、5尺(1.51m)での幹周を記載している。成人男子の平均身長が160センチ程の時代、これは「目通り幹周」に相当する。



■石川県の巨樹

昭和57年、樹木の専門家であった金沢大学教授・里見信生(日本巨樹・巨木の会、初代会長)等が編纂したもので、石川県の他、全国の巨木を紹介している。凡例で、測定方法を記載した日本では最初の書である。

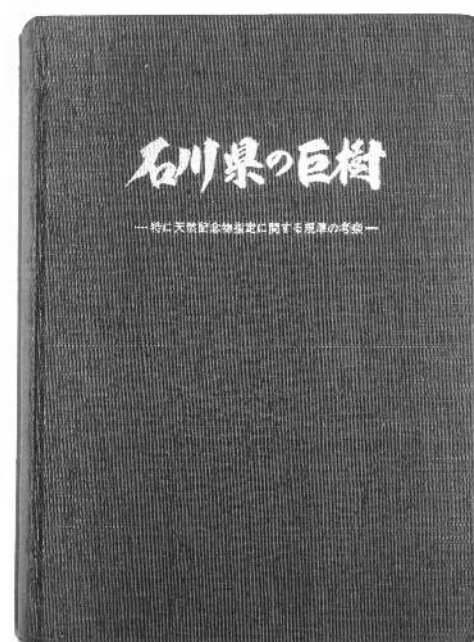
目通幹周(1.5mを測定)に統一。しかし、胸高幹周(1.2mを測定)した者もいた、との記載がある。

1.5m以下で分岐するものは、分岐幹を測定し、並記する。(実際の記載は、1.2mで1.7m、1.5m等・英国式に似る)

目通り幹周が測定されていないものは、1.2m、1.0mの測定値を代用した。

幹周1m以下のものは、根元近くで測定との記載が見える。

※里見信生は実際に石川県の巨木をかなり測定したようだ。しかし、巨木の幹周測定で問題になるのは、叢生樹、奇形のブナ、奇形のスギ等で、石川県にはこれらの巨木がほとんどない事から、測定問題に直面しなかったと推察する。



■環境省の全国巨木・巨樹林調査

1988年に行なった調査で統一基準を定めている。

平坦地では、地上1.3m地点の幹周を測定する。

斜面では、山側で1.3m地点を測定する。

分岐幹では1.3m地点の全ての幹周を合計する。

(前記、世界の幹周測定で述べたように、分岐幹の幹周を全て合計するという不可

解な測定方法は、+記号をプラスと読み違えたと考えられる)

根上りでは、根と幹の境から1.3m地点を測定する。

崖等で測定不能の場合は、計測ポールを用いて直径を出し、3.14倍する。

■その他の測定方法

元営林署職員からの聞き取り調査では、植林されたスギ等は直径が重要視されるので、輪尺や直径巻尺が用いられた。そのため、巨木になると計測ポールによって直径を出し、3.14倍したという。又、変形巨樹の場合は、この方法が当てはまらないので、幹の凹凸に沿って測定したという。幹の凹凸に沿って測定するという方法は、世界的にも例がなく、日本の限られた組織で行なわれていたと思われるが、文献資料がない。